

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	17 / 2005 / 1-3
タイトル	【緒言】「やぶなべ会」でどこへ行こうか！
著 者 名	やぶなべ会会長 室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

緒言 「やぶなべ会」でどこへ行こうか!

やぶなべ会会長 室谷 洋 司

「愛・地球博」が始まった。9月25日までの1500万人入場をもくろむロングランだ。そのテーマは「自然の叡知」で、おまけのサブテーマに①宇宙、生命と情報、②人生の“わざ”と知恵、③循環型社会、などが加わる。今から20年近く前に、愛知県は「技術・文化・交流—新しい地球創造」として、瀬戸市にある里山の「海上(かいしよ)の森」650ヘクタールを大改造して4000万人の集客をもくろんだ。ところが身近な自然環境を奪われまいと市民運動の輪がひろがり、猛禽オオタカの生息が確認されるにいたって、国際博覧会事務局が地元の構想に待ったをかけた。このことから、主会場を既に開発された愛知青少年公園に移さざるを得なかったのである。

愛知県と地元経済界をあげて、今から35年前の「1970大阪万博」にあやかろうとしたのだろうが、この年月のもつ意味はあまりにも大きかった。極言すればこの間、日本は高度経済成長と引き換えに身近な自然環境を失った。それなのに、まだ経済優先を掲げて地球環境を蝕ぼうとするトップリダーたち。愛知の市民たちの「愛・地球博」をめぐる開発か環境かの大論争は自然の成り行きだった。しかし、「日本自然保護協会」「世界自然保護基金ジャパン」「日本野鳥の会」の自然保護3団体が参加を見合わせたことは、自然環境の過去、現在、未来へのとらえ方が、体制側にまだまだ不十分なことを示しているのだろう。一見、先取りしたようなテーマ「自然の叡知」だけが浮き上がり、まるでテーマパークを見る風情の群集が尾張・名古屋に押し寄せるのであろう。これからの半年間はやりきれない。

この2月、ノーベル平和賞受賞のケニア環境副大臣ワンガリ・マータイさんが来日した。このとき日本語の「もったいない」という言葉の意味を知って大きな感銘を受けたという。これこそ消費削減(リデュース)、再使用(リユース)、資源再利用(リサイクル)、修理(リペア)の四つの「R」を表しているとし、「MOTTAINAI」と書かれたTシャツを手にかざして、国連の閣僚級会合で紹介したという。よくあることだが、この逆輸入で日本各地ではいま、「もったいないキャンペーン」が始まっている。

日本人の精神というか遺伝子のなかに、マータイさんをして世界に発信せしめた素晴らしい、いましめがあったはずなのに現状はどうなっているのだろうか。かつて鎖国を解き放つときに、黒船が大きな役割を果たしたが、それに代わる何か絶対的なものがこの国、社会に大きな力となって降りかかってこないとどうしようもないのだろうか。

のっけから変な書き出しになったが、私自身は「やぶなべ会10代」で1958(昭和33)年に生物部を巣立った。47年も前のことで、会そのものの歴史からすれば半世紀以上もたつ。日本が第二次世界大戦に敗れて焦土に化したあと、池田勇人内閣(1960年～)の高度経済

成長宣言は日本人を勇気づけ、あれよあれよという間に世界のトップレベルにのし上がった。ところが田中角栄内閣(1972年～)の「日本列島改造論」から大きく脱線しはじめたようである。

これは日本に限ったことではなく、1972(昭和47)年にストックホルムで第一回国連人間環境会議が開催されたことから分かるように地球全体のことであった。ほどなくしてエコマーク、ついでエコビジネスなるものが氾濫して、冒頭の「自然の叡智」のような、レッテルと中身のあまりの違いにひんしゆくを覚えた人は少なくないだろう。この30年間、エコノミーとエコロジーが常に対立しながら、あるいは環境にやさしいと見せかけながら、実際には商売につなげていたように思えてならない。国民は飽くなき快適さをめざしてきた。我慢、ガマンなんてとんでもない。何がもったいないのか。消費は美德だ……。大人も子どもも一気に走り続けた。

黒船らしいものがぼんやりと見えた。京都議定書である。地球温暖化と二酸化炭素の忌まわしい関係である。しかし、超大国アメリカが批准しないとか、恵まれなかった発展途上国が先進国に対して何を勝手なことをいうのか、などとなればこれも腰砕け状態である。しかしこれは誰がどう見ても大ごとで、やがて黒船は巨大な嵐をともしないながら目の前に現れ、地球びとに最後通告を突きつけるであろう。子々孫々の時代に清浄な空気や水、緑の自然を残さなくても良いのか、と。

昨年の夏に、久しぶりの「やぶなべ会」総会が開かれた。この模様は本号にまとめてあるが、出席者が18人もあってかなりの盛会であった。かつて毎年数十人が集まり、鍋をたいらげソフトボールに興じたことを思えば、とても「かなり」とは言えないが、蝦名憲氏の挨拶のことは、何とか少しずつでも盛り上げていきたいという気持ちががにじみ出ている。

「やぶなべ会」活動の退潮にはさまざまな事情があったと思う。上に述べた30年間の重さは拭うべくもなく、卒業生にすれば社会のしくみのなかに身動きがとれず、また在校生にしてみれば受験一辺倒や部活動のスポーツ優先、そして予備軍の子供たちには親をも含めて、生き物へのふれあいの習慣が失われてしまった、などなど事情は根深く可成りの重症であった。

一方、「やぶなべ会」の来し方を思うとき、そこには自然に浸りきったフィールドワークが常に基本にあった。名前の「藪なべ」からも強く匂ってくる。これを「やぶなべ精神」とするならば、「愛・地球博」の市民派にもあったように、大小は問わずこれからの自然環境の維持、保全に対して大きな役割が期待されているのではないだろうか。何も肩ひじを張って大上段に振りかぶる必要はないが、先般の総会や懇談会のなかで、このような気持ちのほとばしるのを強く感じた。

まず退潮を食い止め復活にステップアップするために、語らいの場を多く設けるのはどうだろうか。身近なテーマについてまとめている事柄があれば、発表の機会を多く作っていき

い。この繰り返しは、これからの持続のエネルギーになるのではないだろうか。今のところ、集まりはまだ少ないが、当面は会報発行をメディアにして前向きに歩みたいものだ。健全な会の基本は財政である。これについて総会の総意は、いまはやりの IT 技術で補おうということであった。「やぶなべ会報 17 号」の本号から CD-R 版として配布される。また電子メールによるネットワークづくりも進められている。もちろん、CD-R 版だけでなくプリント簡便製本版も希望者には応えていく。総会のときに開催している講演会を一般市民にも開放したらどうか、という提言もあった。

このようにじわじわと、往年のような活況を取り戻していきたいものである。親睦はもちろんのこと、「やぶなべ精神」を必要としている問題解決の事例は周囲に充満しているように思うのだが。

(2005.03.25)